

# 作為と不作為の比較に関する認知発達

## —不作為に対するバイアスの変化—

京都大学<sup>1)</sup> 林 創

### Cognitive developmental about the comparison of commission and omission.

Kyoto University Hajimu Hayashi

#### 要 約

本研究は、子どもたちの「作為」と「不作為」の道徳的な判断の程度に差があるかどうかを比較検討し、その発達過程を調査したものである。「悪い行為」には、積極的な動作がある犯罪が「作為」と積極的な動作がない「不作為」があり、一般に大人では、作為の方が不作為よりもより悪いと判断する「不作為バイアス」が生じることが知られている。発達の研究によると、不作為バイアスは、年少で生じるものの、一度消失し、年齢が増すと再び現れるというU字 (U-shaped) 型の発達をすることが報告されているが、調査に改善の余地があった。課題等を厳密にした上で追試したところ、日本人においても、先行研究と同様に、不作為バイアスはU字 (U-shaped) 型の発達をすることが示唆された。

**【キー・ワード】 作為, 不作為, 道徳的判断**

#### Abstract

This study examined whether there is a developmental difference in moral judgments between acts of commission and omission. Previous studies have repeatedly shown that adult people judge acts of commission as morally worse than equivalent acts of omission. This tendency is called “omission bias.” A developmental study showed that omission bias was found in younger children, but not in older children. Therefore, this bias might follow a U-shaped trend. The present study replicated that there is the developmental trend by using refined tasks obtained the preliminary studies. The results showed that this bias followed a U-shaped trend in Japanese.

**【Key Words】 commission, omission, moral judgments, omission bias**

---

<sup>1)</sup> 現所属：岡山大学

## 問題と目的

我々人間が行う悪事には、動作や言葉といった言動が伴っていることが一般的である。たとえば、人を殴ってケガをさせた場合、「殴る」という動作をもとに責任が問われる。しかしながら、言動が伴ってなくても悪い場合がある。たとえば、川で溺れている人を助けずに立ち去った場合、「何もしない」という動きのない行為に対して責任が問われることになるだろう。刑法では、これらの2つの種類の行為が区別され、「殴る」といった積極的な動作がある犯罪が「作為 (commission)」であり、「何もしない」といった積極的な動作がない犯罪が「不作為 (omission)」であるとそれぞれ定義されている (e. g., 船山, 1999)。

一般に、作為と不作為を比較すると、それらの行為を生み出した「意図」や、それらの行為によって生じた「結果」が同等であったとしても、作為の方が不作為よりもより悪いと判断する「不作為バイアス (omission bias)」が生じることが明らかにされている (e. g., Haidt & Baron, 1996; Spranca, Minsk, & Baron, 1991)。しかしながら、不作為バイアスの研究は、多くが大人を対象とした実験や調査である。そこで、不作為バイアスは、どのような発達過程をへるのかという発達の検討が必要となる。

Baron, Granato, Spranca, and Teubal (1993) は、アメリカの1年生 (小学校: 平均 7.3 歳) と7年生 (中学校: 平均 12.4 歳) を対象に、不作為バイアスがどの程度生じるかを検討した。その結果、2年生では、77%の子どもたちに不作為バイアスが見られたが、7年生では40%しか見られなかった。上記のように、大人では不作為バイアスが強く見られる (95%程度) ことから、不作為バイアスは、幼少期から既に存在しているものの、年齢が上がるにつれて、一度出現率が低下し、大人になるとまた強く現れるというように、U字 (U-shaped) 型の発達をすると解釈された。

ここで、不作為バイアスの発達過程を検討する前に、「作為と不作為のそれぞれを認識できるようになる上で、発達の差があるのかどうか」を確認しておく必要がある。なぜなら、不作為バイアスを調べる研究は、「作為と不作為を両方とも既に認識できることが前提」となっており、それらを直接比較して道徳判断の程度を比較する手法を取るため、その前提が成り立つかどうかを確認しておくことが重要である。作為は、その動作を目で見ることができたり、その言葉を耳で聞くことができるといったように知覚的に容易に認識できるのに対して、不作為は、動作や言葉がなく、認識しにくいため、作為の方が不作為よりも年少の時点から理解できる可能性も考えられる。Hayashi (2006, 2007) は、4歳から11歳までの幼児と児童を対象に、作為と不作為の認識ができる時期に発達差があるのかどうかを検討した。その結果、6歳頃を境に、作為と不作為の両方を正確に認識できるようになるが、どの年齢においても、作為と不作為の認識に違いはなく、発達差は見られなかった。このことから、少なくとも6歳頃以降には、作為と不作為を直接比較する手法を取ることができると考えられる。また、5歳頃からは既に意図を認識して、道徳的な判断を始めることも報告されている (e. g., Karniol, 1978; Nelson, 1980)。

以上を踏まえて、本研究では6歳以降の児童期の子どもを対象に、不作為バイアスが、人間の発達

において、どのような過程をへるのかを検討することとした。Baron et al. (1993) が報告した結果のように、U字型の発達が見られるのか、それとも年齢が上昇するにつれて、不作為バイアスが生じる割合が増えていくという直線的な発達が見られるのか、その認知発達のな変化を明らかにすることを本研究の目的とした。

## 調査 1

調査 1 では、本調査(調査 2)において課題として使える状況を探るため、先行研究(e.g., Baron et al., 1993; Haidt & Baron, 1996; Spranca et al., 1991) や法律(主に「刑法」)の専門書(e.g., 船山, 1999)などを参考に、「作為」と「不作為」の定義の違いを確認した上で、作為と不作為の例を集めることを目的とした。ただし、子ども用の課題を作成するため、殺人といった凶悪な例ではなく、法的な厳密さよりも日常的な場面を想定し、回答を求めた。なお、調査 1 は、中間報告である林(2008)で報告済みであるため、以下では要点のみ概略する。

## 方法

**調査対象者** 大阪府内の大学生 35 人(男性 18 人, 女性 16 人; 平均年齢 20.2 歳)

**調査用紙** B4 判の用紙の左側に、年齢と性別の記入欄を設け、その下に教示文を配置した。また、右側を回答とした。教示文では、まず、悪事について、積極的な動作がある場合とそうでない場合があることを例示しながら、積極的な動作が伴う場合を「作為」、積極的な動作がない場合を「不作為」ということを明示した。その後、「これは不作為だ(積極的な動作がない悪事だ)」と思う例があれば、自由に何でも書いてくださいと記した。その際、作為と不作為がペアになっていると有難いことと、「レストランで会計をしたら、誤ってお釣りを多くもらったが、何も言わず(訂正せずに)、家に帰った」、「前を歩いている人が、ハンカチを落としたことに気づいたのに、拾ってあげない(声をかけてあげない)」といった日常的な事例でかまわないことを教示し、凶悪な例ではなく、ふだん身の回りで起こっていることに注意が向くように誘導した。

**手続き** 大学の授業において、出席確認を兼ねて授業の感想を書いてもらう時間を使って、集団で実施した。所要時間は 10~15 分程度であった。

## 結果と考察

無回答者が 2 人いたものの、残りの 33 人から計 47 の例を得られた(ペアで回答してもらえたものが 9 例あった)。このうち、法律などと照らし合わせて、不作為とは言いがたい例が 5 例であった。残りの 42 例について、意図の有無と、意図がある場合にはその内容に分けてまとめたものを表 1 に示す。

表1 回答の分類

意図							なし	計
あり								
不親切	怠け	無視	欺き	釣り銭詐欺	親切			
17	9	6	3	2	1	4	42	

意図がある場合として、さらに6つに分類した。「不親切」は、「落とし物を拾ってあげない」「電車で席を譲ってあげない」「迷子の子どもがいて、泣いていても、見て見ぬフリをして助けない」など、故意によって不親切になる不作為の回答を当てはめた。「怠け」は、「借りたものをそのままにする(返却しない)」「電車の中で携帯電話をマナーモードにしない」など、やろうと思えばすぐにできることを、面倒がってしないと考えられる回答を当てはめた。「無視」は、「いじめに気づいても気づかないふりをする」など、関わり合いになるのを意図的に避けようといったニュアンスがある回答を当てはめた。「欺き」は、「自分だけお菓子をもらったのに、兄弟に言わない(で、一人で食べてしまう)」など、不作為によって、意図的に自分だけ利益を得ようとする回答を当てはめた。「釣り銭詐欺」は、「おつりを多くもらったのに、黙って受け取ってしまう」という回答を当てはめた。「親切」は、「仲の良い子の悪事を黙っている」という回答を当てはめた。

これに対して、意図がない場合は、「重要な伝言があったのだが、忘れていて本人に伝えなかった」などのように、うっかり忘れていたことが原因で言動が生起しなかった例を当てはめた。これは、過失の不作為であり、刑法で「忘却犯」と呼ばれることもあるものである。

以上の分類をもとにするが、本研究では、意図が明確であることが求められるため、意図がない場合(過失の不作為)に相当する4例は除外した。意図がある場合の6つの分類については、不親切(例:「電車で席を譲ってあげない」と無視(例:「いじめの傍観」)では、行為者の意味合いが違う場合もあるが、意図的に気づかないふりをするという点では同じであること、また、子どもに実施する場合、「いじめ」という文脈を提示するのは倫理的に問題があり、調査協力を得られない可能性が考えられたため、本研究では、「不親切」に統合して考えることにした。その他については、課題状況を多様にするために、「不親切」「怠け」「欺き」「釣り銭詐欺」「親切」の5つを採用することにした。この5つについて、凶悪な犯罪的状況は、道徳的に見て軽度に違反した状況に置き換えた上で、子どもへの実施に耐えうる課題を生み出すことにした。

## 調査2

調査2(本調査)では、調査1で精選した5つの状況をもとに、作為のお話と不作為のお話を提示した後に、「どちらの男の子がより悪いことをしましたか?」と聞く。その結果、作為のお話の方がより悪いことをしたと答える場合、不作為バイアスが生じたと判定し、年齢ごとに、その割合を算出

する。その発達過程は、Baron et al. (1993) が報告した結果のように、U字型の発達が見られるのか、それとも年齢が上昇するにつれて、不作為バイアスが生じる割合が増えていくという直線的な発達が見られるのかを明らかにする。

## 方法

**調査対象者** 小学生 80 人（2 年生 41 人；平均年齢 8.2 歳，6 年生 39 人；平均年齢 12.2 歳）と大学生 30 人（平均年齢 20.8 歳）であった。

**調査用紙の構成** Hayashi (2007) を参考に、B4 判中綴じの絵本形式として、Hayashi (2006) をもとに作成した 5 つの課題を用意した。各課題は、お話①とお話②で構成され、一方のお話は「男の子が何かをする（言動あり：作為）」ことで、もう一方のお話は「何もしない（言動なし：不作為）」ことで、どちらも男の子が何らかの得をするお話とした。それらの行為を生み出した男の子の「意図」や、それらの行為によって生じた「結果」は、2 つのお話のそれぞれで同じ文によって表現し、同等とした。具体例をあげると、「欺き」の課題では以下のような文脈とした。太字の部分のみ、作為と不作為で異なる点であった

- (a) 男の子と女の子は、冷蔵庫にチョコレートが入っているのを見つけるが、2 人ともお腹がいっぱいなので、後で食べることにする。
- (b) その後、男の子だけ「冷蔵庫にあったチョコレートを棚に移動させた」ことをお母さんから聞くが、女の子はこのことを聞いていない。
- (c) その後、女の子が、冷蔵庫を開けてチョコレートを探すが、見つからない。

**(不作為のお話) その様子を見ている男の子は何も言わない。**

**(作為のお話) 女の子は男の子に「チョコレートがどこにあるか知っている？」と聞くが、男の子は女の子に「僕は知らないよ」と嘘を言う。**

- (d) 女の子は、悲しい顔をして、外に出かける。
- (e) その後、男の子は、棚からチョコレートを取り出して、一人で食べる。

調査用紙 4 ページで 1 つの課題を配置した。各課題において、最初の見開き 2 ページのうち、左側にお話①を、右側にお話②を配置した。次の 2 ページに以下の質問を用意した。第 1 は、判断質問で、どちらの男の子がより悪いことをしたかを問うものであった。選択肢は、「お話①の男の子、お話②の男の子、どちらも同じくらい悪い、どちらも悪くない」の 4 つだった。第 2 は、確認質問で、2 つのお話を理解した上で区別できているかを問うものであった。お話①とお話②での作為と不作為の割り当ては、課題ごとにカウンターバランスした。

**手続き** 小学生には、すべての学年で各課題の文章と質問を一度だけ読み上げ、全員が同時に進むようにした。大学生には、各自のペースで進めてもらった。

## 結果と考察

確認質問は、各学年のほとんどの課題で100%に近かった。したがって、各課題で2つのお話を区別でき、作為と不作為の違いに関わる部分を、ほとんどの場合で認識できていたと考えられた。

判断質問について、5つの課題の正答率を表2に示す。5つの課題すべてで、どの学年においても、作為のお話の方が不作為のお話よりも悪いと判断する割合が高かった。5つの課題について、不作為よりも作為の方をより悪いとする選択肢を選んだ場合を1、逆に作為よりも不作為の方をより悪いとする選択肢を選んだ場合を-1、「どちらも同じくらい悪い」または「どちらも悪くない」を選んだ場合を0として、5つの課題の値の合計を算出し、それを5で割ったものを、各個人のバイアス値（範囲：-1から1まで）とした。各学年でバイアス値の平均値を算出したところ、2年生で0.62( $SD=0.24$ )、6年生で0.49( $SD=0.32$ )、大学生で0.60( $SD=0.26$ )で、いずれも0より有意に大きかった( $t(40)=16.27$ ,  $p<.01$ ;  $t(38)=9.49$ ,  $p<.01$ ;  $t(29)=14.27$ ,  $p<.01$ )。この結果は、すべての学年で、不作為バイアスが生じていたことを示す。

また、バイアス値について、学年間で差があるかを1要因分散分析によって調べたところ、10%水準であるが差が見られ( $F(2, 107)=2.44$ ,  $p<.10$ )、*LSD*法による多重比較の結果、2年生の方が6年生よりバイアス値が高かった。その他の間には、有意な差はなかった。

以上より、大人のみならず、児童期の子どもでも不作為バイアスは生じたといえるが、Baron et al. (1993)と同様に年少の子どもの方が不作為バイアスを示す割合が高く、日本においても、年齢が上がるにつれて、一度出現率が低下し、大人になるとまた現れるというように、U字型の発達をする可能性が示唆された。ただし、実際にそのような傾向が頑健なものかどうかを結論するのは、今後の更なる検討が必要であろう。

その理由は第1に、学年間の差は10%水準での差である上に、6年生と大学生では、大学生の方が不作為バイアスを示す傾向が高かったが、統計的に有意な差はなかった。すなわち、学年間で大きな差を得られているわけではない。第2に、たとえば「親切」の状況とした課題では、他の4つの課題と違って、不作為バイアスの程度が弱く、むしろ逆に不作為の方がより悪いと判断する者も多かった。このように、課題間で道徳判断の程度に差があるということは、不作為バイアスの程度は状況に依存することを示すと考えられる。第3に、5つの課題すべてで、作為と不作為のどちらも同じくらい悪いと判断する者も多かった。このような判断をした者に、強制的に二択の形で、作為と不作為のどちらがより悪いかを改めて尋ねた場合は、学年によって結果が変わってくるかもしれないだろう。第4に、5つの課題すべてで、大人（大学生）の不作為バイアスの強さが、大人の先行研究で報告されているほど（95%程度）ではなかった。この点は、本研究では、課題状況を子どもにわかりやすいものに設定したことにより、大人では作為と不作為の差をあまり強く感じなかったのかもしれない。

以上のような点を考慮すると、不作為バイアスがU字型の発達をすることが頑健かどうかは、今後の検討が必要となる。本調査では、調査対象者数が少なく改善の余地があるだろう。課題の提示順序を増やし、さらに同程度の調査対象者に実施することで、データが安定し、不作為バイアスの発達過程がより明確になるだろう。

表 2 5つの課題での判断質問の正答率

	不親切		
	2年生	6年生	大学生
作為の方が悪い	95.1%	68.4%	77.8%
不作為の方が悪い	0%	0%	3.7%
どちらも同じくらい悪い	4.9%	28.9%	18.5%
どちらも悪くない	0%	2.6%	0%
	怠け		
	2年生	6年生	大学生
作為の方が悪い	90.0%	71.8%	76.7%
不作為の方が悪い	0%	0%	0%
どちらも同じくらい悪い	10.0%	25.6%	20.0%
どちらも悪くない	0%	2.6%	3.3%
	欺き		
	2年生	6年生	大学生
作為の方が悪い	56.4%	36.8%	51.7%
不作為の方が悪い	5.1%	10.5%	3.4%
どちらも同じくらい悪い	35.9%	52.6%	41.4%
どちらも悪くない	2.6%	0%	3.4%
	釣り銭詐欺		
	2年生	6年生	大学生
作為の方が悪い	38.9%	37.1%	48.0%
不作為の方が悪い	8.3%	0%	0%
どちらも同じくらい悪い	52.8%	62.9%	52.0%
どちらも悪くない	0%	0%	0%
	親切		
	2年生	6年生	大学生
作為の方が悪い	35.0%	32.4%	37.0%
不作為の方が悪い	27.5%	13.5%	7.4%
どちらも同じくらい悪い	25.0%	32.4%	14.8%
どちらも悪くない	12.5%	21.6%	40.7%

## まとめと展望

道徳判断の認知発達を調べる研究は、Piaget (1932) のオリジナルの研究以来、数多くなされているが、これらの研究で扱われている課題の状況は、言動がある場合の「作為」であることがほとんどであり、子どもたちが「不作為」をどのように認識しているのか、作為と不作為の間で認知発達に違いがあるのかどうか、ほとんど検討されてこなかった。本研究によって、作為と不作為に関する認知発達の一端が明らかになったといえるだろう。ただし、なぜ発達の過程で、一度、不作為に関する道徳判断の寛容さが弱まるのかについては、詳細な理由は不明であり、今後、さらに検討していく必要があるだろう。また、アメリカと日本のデータだけでは不十分であるので、今後はさらに多様な文化における調査を実施し、データを得ていく必要があるだろう。加えて、作為と不作為の理解の問題は、法律との関連も深く、人間の道徳的意識や法的な認識の問題にもインパクトを与えることができるであろう。

## 引用文献

- Baron, J., Granato, L., Spranca, M., & Teubal, E. (1993). Decision-making biases in children and early adolescents: Exploratory studies. *Merrill-Palmer Quarterly*, *39*, 22–46.
- 船山泰範 (1999) 基本法学叢書 刑法 弘文堂
- Haidt, J., & Baron, J. (1996). Social roles and the moral judgement of acts and omissions. *European Journal of Social Psychology*, *26*, 201-218.
- Hayashi, H. (2006). Young Children's Understanding of Commission and Omission. Poster presented at the 19th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development, Melbourne, Australia.
- Hayashi, H. (2007). Children's moral judgments of commission and omission based on their understanding of second-order mental states. *Japanese Psychological Research*, *49*, 261-274.
- 林 創 (2008). 作為と不作為の理解に関する認知発達の研究 発達研究, *22*, 229-234.
- Karniol, R. (1978). Children's use of intention cues in evaluating behavior. *Psychological Bulletin*, *85*, 76–85.
- Nelson, S. A. (1980). Factors influencing young children's use of motives and outcomes as moral criteria. *Child Development*, *51*, 823–829.
- Piaget, J. (1932). *The moral judgment of the child*. New York: Free Press.
- Spranca, M., Minsk, E., & Baron, J. (1991). Omission and commission in judgment and choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, *27*, 76-105.



## 謝 辞

お忙しい中，本調査にご協力いただいた京都市内の小学校の先生方，児童のみなさまに厚く御礼申し上げます。

